

【原著論文】

保育所における生活課題を抱える保護者への支援の課題
—保育ソーシャルワーク研究の文献レビューを通して—

Issues of support in nursery schools for parents suffering from life task:
A review of child care social work research

鶴 宏史* 中谷奈津子** 関川芳孝**

TSURU, Hirofumi* NAKATANI, Natsuko** SEKIKAWA, Yoshitaka**

要旨

本研究の目的は、保育ソーシャルワーク（以下、保育 SW）に関する研究のレビューを通して、保育所における保護者支援の課題を明確にすることである。保育 SW に関する 35 本の文献を、保育 SW の機能、保育所内での組織的対応の有無、保育 SW の対応課題に生活課題までを含むか、保育 SW の基礎となる援助理論、の 4 つの枠組みで分析した。その結果、保育 SW の主な機能は相談援助機能と連携機能である点、組織的対応の重要性が指摘されていたが具体性には乏しい点、子育て以外の生活課題への言及はあったが具体的内容は不明であった点、基礎となる援助理論としてジェネラリスト・アプローチとエコロジカル・アプローチの重要性が指摘された点が明らかになった。今後の保護者支援の課題として、面接技術及びアセスメント技術の習得、連携の具体的方法の明確化、保育所内の組織的対応の具体化、継続的な現任者への研修体制の確立が挙げられた。

1. 本研究の背景と目的

保育所が対応する保護者の抱える子育て課題は、子どもの関わり方やしつけなどの相談など、日々の対応で解決できるものから、児童虐待のように保育所内での連携や他機関との連携が求められるものまで幅広い。深刻な課題ほどその背景に、子育て以外の生活上の課題、例えば、経済的困難や保護者の疾病・障害、夫婦関係の不調があることが多い。そのため、保育所には様々な生活課題を見定めた対応が求められる場合がある。なお、ここでいう生活課題とは、保護者の健康、経済、就労、教育、家族関係、社会関係・社会参加に関する困難と捉える¹。

『保育所保育指針解説書』には「保育所においては、子育て等に関する相談や助言など、子育て支援のため、保育士や他の専門性を有する職員が相応にソーシャルワーク機能を果たすことも必要になります。その機能は、現状では主として保育士が担うこととなります²と記されている。しかし一方で、「保育所においては、保育士等がこれらの活動をすべて行うことは難しいといえますが、これらのソーシャルワークの知識や技術を一部活用することが大切です³と結論づけられている。結局のところ、保育所や保育士がソーシャルワーク機能のどの部分を、どの程度担うのかは曖昧である。

このような曖昧さは残るものの、保育所や保育士のソ

シャルワーク機能が期待され、この十数年、保育所におけるソーシャルワーク、あるいは保育士によるソーシャルワーク（以下、総称として保育ソーシャルワークと記載）に関する研究が蓄積され、保育ソーシャルワークの充実に向けて、保育所や保育士の意識、知識、技術の向上の必要性が論じられている。

一方で、山縣ら（2008）⁴は関連する文献のレビューを通して、研究者によって保育ソーシャルワークの捉え方は多様でその主体、内容などが異なるため、今後は多様化する専門性を体系化して、新たな理論を構築する必要性を指摘している。

また、山本（2013）⁵は、文献レビューによって、保育所がソーシャルワークを担うことの限界を指摘する見解を紹介し、どの程度の地域支援が可能かの議論の必要性を提示した上で、保育ソーシャルワークの実践レベルの課題にアセスメントスキルの向上と、保育所の組織的対応の整備を挙げている。

これらの点を踏まえて、本論文では、①保育ソーシャルワークの機能は何か、②保育所でソーシャルワークを展開する際の組織的対応の有無、③保育ソーシャルワークの対応課題として子育て以外の生活課題までを含むか否か、④保育ソーシャルワークの基礎となる援助理論にはどのようなものがあるのか、の 4 点に焦点を当てて文

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

** 大阪府立大学 (Osaka Prefecture University)

文献レビューを行い、それを通して、保育所における保護者支援の課題を明確にすることを目的とする。

2. 方法

文献の検索および文献収集、文献の選定は、以下の方法および手順で行った。

- (1) 文献検索は、CiNii を用い、キーワード検索を「保育ソーシャルワーク」で行った（最終アクセスは 2015 年 4 月 30 日）。
- (2) (1) の文献検索の結果、本研究に直接関連する文献を選択した。ここでいう文献とは、原則として研究目的、方法、結果が明記されている論文（学会発表含む）、実践報告、事例報告である。
- (3) さらに、選択された文献の引用文献、参考文献にも目を通し、必要な文献については抽出し、分析の対象とした。
- (4) 保育所以外の児童福祉施設を対象にした研究、保育士養成課程を対象とした研究、文献レビューを目的とした研究は除外した。
- (5) 分析の枠組みは、前述のように、保育ソーシャルワークの機能は何か、保育所でソーシャルワークを展開する際の組織的対応の有無、保育ソーシャルワークの対応課題として子育て以外の生活課題までを含むか否か、保育ソーシャルワークの基礎となる援理理論にはどのようなものがあるのか、である。

3. 結果

CiNii による文献検索の結果、110 本の文献が該当したが、直接本研究と関連した文献は表 1 のように 37 本であった。以下、4 つの分析枠組みに沿って結果を示す。なお、本節において、レビューの対象となった文献については、注には示していないため表 1 を参照のこと。

(1) 保育ソーシャルワークの機能は何か

保育ソーシャルワークの機能は、空閑 (2009)⁶、日本社会福祉実践理論学会ソーシャルワーク研究会 (1998)⁷、齊藤・谷口 (1999)⁸ をもとに表 2 に示すようにソーシャルワーカーの役割から 15 の分類項目を設定し分類した。結果、表 3 のように、相談援助機能が最も多く 32 本の論文で取り上げられ、次いで連携機能が 26 本の論文で取り上げられていた。

相談援助機能については、日々の保護者や保育士の関わりや子育て相談においてその機能を想定しているものが大半であった。この機能を発揮するために、今堀 (2002) や石井 (2002) は保育士がカウンセリング・マインドを有することの重要性を述べている。また、山本 (2000) は、保育所における相談援助はカウンセリングにとどまらず「ガイダンス的な相談活動」が中心である

うと指摘する。

具体的な技法に焦点を当てた研究として、鶴 (2004 ; 2005) は、保育士が保護者とのパートナーシップ形成のための面接技法を習得することの重要性を指摘する。また、安藤 (2008) は、保育士が生活場面面接の技術を習得することを提案し、子育て相談を行う場合、保護者と共有できる場として送迎の時間帯を活用し、継続的に毎日かわる保育士が保護者の相談を受けることに意味があるとしている。

連携機能については、各文献において、保育所と各種社会資源とが相互に連携し、ネットワークを形成し、それが有効に機能することの重要性を指摘していた。また、①日々の保育の充実や地域の子育て力向上のために地域住民や老人会などとの連携、②子どもの障害、保護者の育児不安、児童虐待など親子の抱える課題対応やために他専門機関との連携に分類できた。すなわち、前者はインフォーマルな組織との連携で、後者がフォーマルな組織との連携である。

原田 (2011) や原田・坂野・中村 (2011) は、「現場－機関連携の原則」として社会資源との連携を保育ソーシャルワークの原則の一つとして挙げている。土田 (2006) は、保育所のフィールドワークから、保育所内だけでの問題解決が困難な場合にネットワークを用いての対応を保育所が行っていることを見出している。百瀬と丸山 (2011) は、事例分析を通して、連携の具体的方法として子育て情報誌の共同作成、関係機関の会議の実施、親子の課題に応じた関係との協力、町内会・老人会などとの親睦を明らかにした。さらに森内と奥 (2010) は関連する概念として「協働」について論じ、その意味・内容を意識して用いる必要性を指摘している。

石田 (2007) は、保育所への調査を通して、①保育所が公的機関との高い連携意識を有しているが、インフォーマルな組織などとの連携意識が低いこと、②ただし、子育て支援に対する意識が高い保育所は、インフォーマルな組織との連携意識が高いことを明らかにした上で、社会資源との連携意識を高めることを課題として挙げている。

また、米山 (2012) は保育所への調査を通して、十分に連携がとれている機関とそうでない機関があることを明らかにし、連携の弱い部分をいかに強化するかを今後の課題として提示している。

(2) 組織的対応の有無

保育所においてソーシャルワークを展開する際の、保育所内の組織的対応に言及した文献は 9 本であった（今堀, 2002 ; 2005 ; 土田, 2006 ; 2010 ; 2011 ; 松岡, 2007 ; 伊藤・渡辺, 2008 ; 原田, 2011 ; 原田・坂野・中村, 2011）。

表1 分析の対象となった文献リスト

NO	論文
1	山本真実「保育所機能の多様化とソーシャルワーク」『ソーシャルワーク研究』26(3),2000,pp.193~200
2	今堀美樹「保育ソーシャルワーク研究—保育士の専門性をめぐる保育内容と援助技術の問題から—」『神学と人文(大阪キリスト教短期大学)』42,2002,pp.183-191
3	石井哲夫「私説 保育ソーシャルワーク論」『白梅学園短期大学 教育・福祉研究センター研究年報』7,2002,pp.1-3
4	石田慎二・前迫ゆり・智原江美・中田奈月・高岡昌子・福田公教(2004)「保育所におけるソーシャルワーク援助」『研究紀要(奈良佐保短期大学)』12,2004,pp.9-17
5	鶴宏史「子育て支援における援助初期面接技法に関する考察:保育ソーシャルワーク試論(その1)」『神戸親和女子大学福祉臨床学科紀要』1,2004,pp.49-56
6	赤瀬川修「保育士による家族に対するソーシャルワークに関する研究」『九州栄養福祉大学研究紀要』2,2005,pp.85-95
7	福田公教・石田慎二「保育所におけるソーシャルワーク機能の検討」『佛教福祉学(種智院大学佛教福祉学会)』13,2005,pp.71-81
8	今堀美樹「保育ソーシャルワーク研究—保育所におけるスーパービジョンの適用方法をめぐって—」『神学と人文(大阪キリスト教短期大学)』45,2005,pp.147-154
9	野島正剛「保育者のソーシャルワーク、カウンセリングと家族支援:親のエンパワメント」『紀要(上田女子短期大学)』28,2005,pp.41-50
10	鶴宏史「子育て支援における援助初期面接技法に関する考察(事例編):保育ソーシャルワーク試論(その2)」『神戸親和女子大学福祉臨床学科紀要』2,2005,55-65
11	石田慎二「保育所の子育て支援に対する意識とソーシャルワーク機能に関する考察」『社会福祉士(日本社会福祉士会)』13,2009,pp.109-115
12	土田美世子「エコロジカル・パースペクティブによる保育実践」『ソーシャルワーク研究』31(4),2006,pp.285-294
13	鶴宏史「保育ソーシャルワークの実践モデルに関する考察(その1):保育ソーシャルワーク試論(その3)」『神戸親和女子大学福祉臨床学科紀要』3,2006,pp.65-78
14	伊藤利恵・渡辺俊之「保育ソーシャルワークの展望」『高崎健康福祉大学総合福祉研究所紀要』4(1),2007,pp.29-40
15	松岡俊彦「保育ソーシャルワークを再考する—統合保育の実践から学ぶもの」『子ども家庭福祉学』7,2007,pp.75-80
16	中村和彦「保育実践者による『人—環境』への包括的理解:アセスメントスキル・トレーニングへの構想」『北方圏生活福祉研究所年報(北翔大学)』13,2007,pp.83-92
17	新川泰弘「トランスセオレティカルモデルを活用した保育ソーシャルワーク研修の試み」『研究紀要(日本福祉図書文献学会)』6,2007,pp.111-118
18	井上寿美・笹倉千佳弘「地域子育て支援におけるソーシャルワーク的な実践に関する研究—『保育ソーシャルワーク論』の構築に向けて」『関西福祉大学附置地域福祉政策研究所報告書2008年度』2008,pp.15-20
19	伊藤利恵・渡辺俊之「保育所におけるソーシャルワーク機能についての研究—テキストマイニングによる家族支援についての分析—」『高崎健康福祉大学総合福祉研究所紀要』5(2),2008,pp.1-26
20	伊藤良高・若宮邦彦・桐原誠・宮崎由紀子「保育ソーシャルワークのパラダイム—ケアマネジメント概念を手がかりに」『乳幼児教育学研究』17,2008,pp.9-18
21	蘇珍伊「保育所におけるソーシャルワークの機能に関する研究—保育士の役割に焦点を当てた質的内容分析」『現代教育学研究紀要(中部大学現代教育学研究所)』1,2008,pp.79-88
22	武田英樹「地域に求められる保育士によるソーシャルワーク」『近畿大学豊岡短期大学論集』5,2008,pp.15-25
23	若宮邦彦「保育ソーシャルワークとスーパービジョン」『熊本学園大学論集総合科学』14(2),2008,pp.61-86
24	安藤健一「保育ソーシャルワークに関する一考察—保育士による生活場面面接の可能性—」『清泉女学院短期大学研究紀要』27,2009,pp.1-11
25	森内智子・奥典之「保育と福祉の協働—保育ソーシャルワークの必要性」『四国大学紀要』34,2010,pp.61-65
26	鈴木敏彦・横川剛毅「保育士の業務実践におけるソーシャルワーク機能に関する基礎研究—保育所保育士の保護者支援を中心に」『和泉短期大学研究紀要』30,2010,pp.1-15
27	土田美世子「保育所によるソーシャルワーク支援の可能性:保育所へのアンケート調査からの考察」『龍谷大学社会学部紀要』37,2010,pp.15-27
28	原田明美「保育ソーシャルワーク(神田試論)についての一考察」『名古屋短期大学研究紀要』49,2011,pp.135-150
29	原田明美・坂野早奈美・中村強士「保育ソーシャルワーク論の試み:『子どもの貧困』問題からのアプローチ」『あいち保育研究所研究紀要』2,2011,pp.55-67
30	百瀬ユカリ・丸山アヤ子「保育所併設型の地域子育て支援拠点における保育士の役割」『秋草学園短期大学紀要』28,2011,pp.139-150
31	森内智子・奥典之「保育ソーシャルワーク—理論化への取り組み」『四国大学紀要』35,2011,pp.21-23
32	土田美世子「地域子育て拠点施設としての保育所の機能と可能性:保育所ソーシャルワーク支援からの考察」『龍谷大学社会学部紀要』39,2011,pp.21-31
33	伊藤良高・香崎智郁代・永野典詞・三好明夫・宮崎由紀子「保育現場に親和性のある保育ソーシャルワークの理論と実践モデルに関する一考察」『熊本学園大学論集「総合科学」』19(1),2012,pp.1-21
34	若宮邦彦「保育ソーシャルワークの意義と課題」『南九州大学人間発達研究』2,2012,pp.117-123
35	米山珠里「保育所におけるソーシャルワークに関する現状と課題:弘前市内の保育士に対するアンケート調査結果を中心に」『東北の社会福祉研究』8,2012,pp.47-60
36	高田さやか「保育ソーシャルワークに求められる専門性-「気になる子」の保育園実態調査より-」『夙川学院短期大学研究紀要』42,2015,pp.19-29
37	若宮邦彦「保育スーパービジョンの理論と動向」『南九州大学人間発達研究』5,2015,pp.87-92

表2 保育ソーシャルワーク機能の分類項目

機能	役割
仲介機能	子どもや保護者と、社会資源の仲介者としての役割。保護者に必要な専門機関を紹介するとともに、専門機関との連絡や調整などを行う。
調停機能	子どもや家族と地域社会の間での意見の食い違いや争いが見られる時、その調停者としての役割。親子関係、保護者関係などの調整を行う。
代弁機能	ニーズを自ら表明できない子どもや保護者の代弁者としての役割。保護者に対する子どもの代弁・権利擁護（虐待対応含む）や、地域の保育ニーズへの対応するために保護者を代弁する。
連携機能	各種の公的な社会的サービスや多くのインフォーマルな社会資源の間を結びつける連携者としての役割。他専門機関との連絡、調整、ネットワーク形成などを行う。
処遇機能	施設内の利用者に対する生活全体の直接的な援助、指導、支援者としての役割。日々の保育活動を行う。
相談援助機能	対等な関係性をもとに、保護者とともに問題解決に取り組み、協働するための役割（カウンセラーやセラピストの役割も含む）。子育て相談や助言などを行う。
教育機能	保護者に情報提供をしたり、新たなスキルを提供したり、学習する場を提供する役割。各種の情報提供や子育てに関するスキル学習を行う。
保護機能	生活上に深刻な問題を抱え、生命の危機的状況にあるような状態にある親子に対して、安全な環境を確保する役割。児童虐待からの保護などを行う。
交流支援・組織化機能	フォーマル、インフォーマルな活動や団体を組織する役割。保護者同士をつないだり、子育てサークルの組織支援を行ったりする。
ケースマネジャー（CM）機能	個人や家族へのサービスの継続性、適切なサービスの提供などのケースマネジャーとしての役割。子どもや親に適切な社会資源を結びつけたり、組み合わせたり、他専門機関との連絡・調整を行う。
側面的支援機能	保護者が主体的に子育てに取り組めるように側面的に援助する役割。
管理・運営機能	保育所組織で目的達成のために方針や計画を示し、組織が適切に機能するための維持・調整・管理の役割。所長や主任が保育所の運営管理、職員同士のチームワークの調整を行う。
スーパービジョン（SV）機能	一定の経験を積んだ保育士（園長、主任を含む）による、適切なサービス提供を可能にする支援、保育士の力量向上のための支援を行う役割。保育士への指導・研修を行う。
調査・計画機能	地域のニーズやサービスの整備状況を把握し、その整備などを計画的に進める役割。地域の子育てニーズの調査・把握をする。また、地域の資源の掘り起こしや地域住民の参加の促進、ボランティア育成を行う。
社会変革機能	地域の偏見・差別などの意識、硬直化した制度などの変革を行う社会改良・環境の改善を働きかける役割。子育てしやすい地域や社会をつくるためのソーシャルアクション。

今堀（2002；2005）は、保護者へのソーシャルワークの援助過程を展開する際には、十分な職員組織の連携をとることを指摘する。また、伊藤と渡辺（2008）は「保育所保育指針」の第6章を分析した上で、保育所職員間の共通認識やその体制づくりの重要性を指摘する。

原田（2011）や原田・坂野・中村（2011）は、「園内諸職種間連携の原則」として組織的対応を保育ソーシャルワークの原則の一つとして挙げ、そのために職員間のチームワーク、情報交換、および保育目標の統一を不可欠な要素として提示している。

さらに、松岡（2008）は事例分析を通して、保育ソーシャルワークにおいては、問題を抱える親子を支えるために保育士のチームワーク、役割分担が重要な要素として挙げている。

土田（2006；2010）は、フィールドワークによって保育所全体での理念の共有などを基盤に、役割分担しながら保育所全体としてソーシャルワークを実施できることを明らかにしている。その際、保育所長が主にソーシャルワークを担い、保育士が保育や保護者とのやりとりを担っていることを明らかにしている。

（3）子育て以外の生活課題を含むか否か

保育ソーシャルワークが対応する課題は、ほとんどの文献が保育所利用の有無に関わらず、児童虐待まで含めた子育てに関するものであった。それを踏まえて、さらに子育て以外の生活課題への対応に言及した文献は10本であった（土田，2006；2010；中村，2007；蘇，2008；武田，2008；原田，2011；原田・坂野・中村，2011；百瀬・丸山，2011；伊藤・香崎ら，2012；若宮，2012）。

各文献において、子育て以外の生活課題の具体的な内容は明確ではなかったが、米山（2012）の調査からは保護者の就労や経済問題が推測された。

また、原田（2011）や原田・坂野・中村（2011）は、事例を通して「子どもの貧困」に関わる背景としての保護者の生活問題（家族の貧困、保護者の精神疾患など）について言及している。

武田（2008）は、こうした問題に対して、生活困難状況にある子育て家庭の有するニーズを把握する役割が保育士に求められていることを指摘しつつ、保護者の生活課題に対応するためには地域の社会資源との連携が不可欠であることも指摘している。

表3 保育ソーシャルワークの機能(保育士の役割から捉えた機能)

	仲介	調停	代弁	連携	処遇	相談 援助	教育	保護	交流 支援	CM	側面	管理 運営	SV	調査 計画	社会 変革
山本 (2000)				○	○	○			○	○				○	○
今堀 (2002)				○	○	○									
石井 (2002)			○	○		○		○	○		○				○
石田・前迫ら (2004)				○		○	○								
鶴 (2004)	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○				○
赤瀬川 (2005)				○		○			○					○	○
福田・石田 (2005)				○		○	○								
今堀 (2005)				○		○							○		
野島 (2005)	○				○	○	○								
鶴 (2005)						○									
石田 (2006)				○		○				○					
土田 (2006)				○		○	○		○						○
鶴 (2006)															
伊藤・渡辺 (2007)				○		○									
松岡 (2007)				○	○	○					○				
中村 (2007)						○									
新川 (2007)						○									
井上・笹倉 (2008)									○		○				○
伊藤・渡辺 (2008)				○		○	○	○			○	○			
伊藤・若宮ら (2008)			○							○					
蘇 (2008)		○	○	○	○	○		○							
武田 (2008)			○	○		○	○	○		○	○		○		
若宮 (2008)	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○			○	○
安藤 (2009)						○									
森内・奥 (2010)				○		○									
鈴木・横川 (2010)															
土田 (2010)				○		○					○				
原田 (2011)	○			○	○	○			○					○	
原田・坂野ら (2011)	○			○	○	○			○						
百瀬・丸山 (2011)				○	○	○			○						
森内・奥 (2011)				○		○									
土田 (2011)		○		○		○	○		○		○				
伊藤・香崎ら (2012)	○			○		○	○								
若宮 (2012)			○	○		○			○	○			○	○	
米山 (2012)				○		○			○						
高田 (2015)						○							○		
若宮 (2015)													○		
総計	6	4	7	26	10	32	10	4	13	7	9	1	5	5	7

注) 論文は表1の文献リストの順番と対応し、機能については表2の順番と対応している。なお、機能のCMはケースマネージャー機能の、SVは、スーパービジョン機能の略記である。

さらに、土田（2006）は、保育所の保護者支援はあくまで子どもの権利擁護のためのものであって、保護者が子育ての主体者たるための支援に限定されると指摘する。

(4) 基礎となる援助理論

保育ソーシャルワークの基礎となる援助理論として、ジェネラリスト・アプローチを取り上げた文献が4本（中村, 2007；伊藤・若宮・桐原・宮崎, 2008；若宮, 2008；森内・奥, 2010）、エコロジカル・アプローチを取り上げた文献が3本（土田, 2006；2010；安藤, 2009）、エンパワメント・アプローチを取り上げた論文が1本（野島, 2005）、解決志向アプローチが3本（鶴, 2004；2005；2006）、行動変容アプローチが1本（鶴, 2006）であった。

土田（2006；2010）は、エコロジカル・アプローチ、特に、保育所実践におけるエコロジカル・パースペクティブの必要性について論じ、保育士がこの視点を身につけることで、親子の生活の多面性、多様性、複雑性、連続性を認識することができるとする。そうすることで、支援においては、子ども・家族・地域間の相互作用に注目しながら、子どもとその環境に働きかけることや、保護者とのパートナーシップの形成の重要性を指摘している。

伊藤・若宮・桐原・宮崎（2008）や若宮（2008）は、ジェネラリスト・アプローチを採用することで、親子の課題解決に際して、家庭背景や地域の状況などの背景を捉えることが可能となり、多様なシステムへの関わりが可能になることを指摘している。また、中村（2008）は、子どもや保護者の支援において、保育士が親子の状況を「人-環境」の視点から理解するスキルの向上が求められると指摘する。また、森内と奥（2010）は、ジェネラリスト・アプローチの立場から、協働と調整の違いを意識した連携のあり方の重要性を指摘している。

野島（2005）は、保護者支援におけるエンパワメントの重要性を指摘し、保育士がエンパワメントの視点を持つことで、保護者の人権を配慮しつつ、子育て課題を抱える保護者が主体的に子育てに取り組めるような支援が可能になると論じている。鶴（2004；2005；2006）は、解決志向アプローチの取り入れることで、保護者のストレングスに焦点を当てた関わりが可能になり、保護者とのパートナーシップ形成に有効であることを示している。

4. 考察と今後の課題

本論文の目的は、4つの分析枠組みに基づいて保育ソーシャルワークに関する文献レビューを行い、それを通して保育所における保護者支援の課題を明確にすることであった。以下、結果を踏まえて考察し、今後の課題に言及する。

(1) 保育ソーシャルワークの機能及び基礎となる援助理論と保護者支援の課題

まず、保育ソーシャルワークの機能について、15の機能のうち、相談援助機能および連携機能の2つの機能が期待されているのが明らかになった。この点は山縣ら（2008）⁴の先行研究の結果とも一致している。この背景には『保育所保育指針』の「第6章 保育所における保護者に対する支援の基本」などにおいてこの2つの機能が明示されていることに由来すると推測できる。そのため、両者の機能は、保育ソーシャルワークの機能として明確に位置づけてもよいと考えられる。

相談援助機能は、齊藤と谷口（1999）⁸が指摘するように、支援において最初に用いられるもので、支援活動のプロセスを辿りながら展開され、ある支援プロセスから次のプロセス際に必ず用いられる、基本的かつ重要な機能である。そのため、保育所が相談援助機能を有効に発揮するためには、特に、保育士の面接技術とアセスメント技術の習得が不可欠である。

面接技術については、マイクロカウンセリングなどを基盤とした基本的な面接技術の習得はもちろんであるが、文献レビューにおいて指摘された、生活場面面接の意識化、技法習得が求められるだろう。なぜならば、通常保育士と保護者は送迎時などの日常業務の中で比較的短時間で、しかも面接室以外の場での関わりが多いためである。さらに後述するが、保護者のストレングスに焦点を当て続けることや、保護者とのパートナーシップ形成について常に意識する必要がある。それによって、保護者が主体的な課題解決に向かう姿勢をとることができるためである。こうしたことを通して、効果的な保護者との信頼関係構築、情報収集、問題解決につながることを考える。

アセスメント技術については、2つの側面からの日々の子どもや保護者の姿から生活課題やニーズを捉える視点や技術が必要となる（山本, 2013；中村, 2007）^{5,9}。一つは日々の関わりから小さなサインを見逃さない視点や技術である。そのため、保育士が日々の子どもや保護者との関わりの中で何を求めているのか、そして、何を根拠として生活困難を抱える子どもや家庭と判断し、働きかけていくのかを明らかにしなければならない。もう一つは、子どもや保護者の生活全体をエコロジカルな視点でとらえ、理解するための技術である。そのためには後述する援助理論の習得に加え、生活課題に関するアセスメントに活用できるチェックシートなどの開発が求められる（例えば金子, 2008などを参照）¹⁰。

連携機能については、その重要性が指摘されつつもその方法を明確に示した研究は少なかった。この点は山本（2013）⁵が指摘するように、その具体的方法の明確化が今後の課題である。その際、連携の概念を明確化すると

もに、その展開過程を明らかにする必要があるだろう。

例えば、吉池と栄 (2009)¹¹は、保健医療福祉領域における連携の概念と展開過程を文献レビューによって整理しているが、後者について、①単独解決できない課題の確認、②課題を共有しうる他者の確認、③協力の打診、④目的と確認と目的の一致、⑤役割と責任の確認、⑥情報の共有、⑦連続的な関係の展開、の7段階があることを明らかにしている。このような展開過程を明らかにすることは、連携の具体的方法の明確化の手がかりになると考えている。

これらの機能が有効に働くためには、基礎となる援助理論の理解・習得が求められる。そのためにまずは、文献レビューでも示されたように、ジェネラリティ・アプローチやエコロジカル・アプローチの活用が求められる。それによって、アセスメントにおいて、子どもや家族の生活全体や背景と捉えることが可能となり、同時に親子を取り巻く多様な環境への理解についても深めることができると考えられる。

さらに、エンパワメント・アプローチや解決志向アプローチの考え方は、保護者のストレングスに着目し、それを保護者にも意識させることで保育士とのパートナーシップ構築に有効であるとともに、保護者の主体的な課題解決にも寄与できるであろう。

(2) 組織的対応と保護者支援の課題

これらの機能遂行と同時に、保育士個人でソーシャルワーク機能を全て担うことは不可能であるため、保護者支援における保育所内での組織的対応のあり方を明示する必要もある。文献レビューにおいて組織的対応を検討した結果、保育所内での共通認識と役割分担の重要性が指摘されていた。中谷・鶴・関川 (2015)¹²は、保護者の生活困難の対応において保育所内でどのような役割分担が必要だと考えるかについて調査を行った結果、保育所内の組織的・構造的な支援が必要とされていることを明らかにした。以上のことから、より具体的で、効果的な組織的対応のあり方を明確にする必要がある。

これまで論じてきたことは、まずは保育士養成課程において、「保育相談支援」「相談援助」「家庭支援論」などの保護者支援や地域子育て支援に直接的に関わる科目で学習することになる。しかし、一朝一夕にソーシャルワークの視点や技術などを習得するのは困難であるため、就職後の現任者研修が求められる。もちろん、現在でも各地で様々な研修が実施されているが、加えて継続的な研修体制の確立が必要となるだろう¹³。

(3) 保育ソーシャルワークが対応する課題と保護者支援の課題

最後に、保育ソーシャルワークが対応する課題につい

てであるが、保護者の生活課題にまで言及する研究は少なかった。もちろん、保護者の子育て課題以外の生活課題に保育所のみで関わり、問題解決することは不可能であるし、土田 (2011)¹⁴が指摘するように、保育所の保護者支援は親子の関係構築や養育力の向上が中心であり、保護者の生活課題そのものへの対応に主眼を置くものではない。しかし、育児不安や児童虐待などの子育て課題に対応する際には、保護者や家庭の生活課題に関わる事態も生じうる。

保育所は日々子どもや家庭と関わることができると、上記の課題をクリアしていくことで、子どもや家庭のわずかな変化に気づき、問題が深刻化する前段階で、家庭での生活困難を早期に発見することが可能になると思われる。それによって早期段階で直接的対応や、他機関・施設との連携による対応が可能となるだろう。

【付記】

*本論文は、日本保育学会第67回大会(2014年5月、大阪総合保育大学)の発表「保育所における生活課題を抱える保護者への支援(1)」の原稿を大幅に加筆修正したものである。

*本論文は、科学研究費補助金(基盤研究C 研究課題:保育所における生活困難の早期発見・早期対応と保育所の組織運営に関する研究 課題番号:25350936 研究代表者:中谷奈津子)の成果の一部である。

—注—

- 岡村重夫(1983)の社会生活の基本的要求に基づいている。社会生活の基本的要求とは、①経済的安定、②職業的安定、③家族的安定、④保健・医療の保障、⑤教育の保障、⑥社会参加ないし社会的協同の機会、⑦文化・娯楽の機会をいう。岡村はこの7つの要求を充足する過程の困難を社会生活上の困難と規定した。本研究では、⑦は⑥に含める。
- 厚生労働省編『保育所保育指針解説書』フレーベル館、2008、p. 184。
- 同上書、p. 185。
- 山縣文治研究代表『保育士の子育て支援業務におけるソーシャルワーク機能の検討(2007年度日本証券奨学財団研究調査助成事業報告書)』2008。
- 山本佳代子「保育ソーシャルワークに関する研究動向」『山口県立大学学術情報』6、2013、pp. 49-59。
- 空閑浩人「ソーシャルワーカーの機能」日本社会福祉士会編『新・社会福祉援助の共通基盤<上>(第2版)』中央法規、2009、pp. 214-233。
- 日本社会福祉実践理論学会ソーシャルワーク研究会「ソーシャルワークのあり方に関する調査研究」『社会福祉実践理論研究』7、1998、pp. 69-90。

- 8 齊藤順子・谷口泰史「ソーシャルワーカーの機能と役割」太田義弘・秋山薊二編著『ジェネラル・ソーシャルワーカー社会福祉援助技術総論』光生館, 1999, pp. 115-200.
- 9 中村和彦「保育実践者による『人-環境』への包括的理解: アセスメントスキル・トレーニングへの構想」『北方圏生活福祉研究所年報(北翔大学)』13, 2007, pp. 83-92.
- 10 金子恵美『保育所における家庭支援』全国社会福祉協議会, 2009.
- 11 吉池毅志・栄セツコ「保健医療福祉領域における『連携』の基本的概念整理: 精神保健福祉実践における『連携』に着目して」『桃山学院大学総合研究所紀要』34(3), 2009, pp. 109-122.
- 12 中谷奈津子・鶴宏史・関川芳孝「保育所における生活困難を抱える保護者への支援(4) - 保育所内における役割分担 -」『日本保育学会第68回大会発表要旨集』
- 13 例えば, 大阪府下の民間保育所を対象とした「地域貢献支援員養成研修」が参考になる。地域貢献支援員制度は, 大阪府社会福祉協議会の主催する所定の研修を受けて, 府から認定証を交付された保育士が, 保護者や地域の子育て課題に加え, 保護者の様々な生活課題などに対応し, 子育て支援の充実や地域の関係機関との連携強化を図る制度である。研修回数は, 一年間でおおよそ15回(15回×3時間=45時間)程度である。
- 14 土田美世子「地域子育て拠点施設としての保育所の機能と可能性: 保育所ソーシャルワーク支援からの考察」『龍谷大学社会学部紀要』39, 2011, pp. 21-31.

—参考文献—

- 1 千葉千恵美『保育ソーシャルワークと子育て支援』久美, 2011.
- 2 中谷奈津子・鶴宏史・関川芳孝「保育所における生活課題を抱える保護者への支援の課題 - 保護者支援・保護者対応に関する文献調査から -」『大阪府立大学紀要(人文・社会科学)』63, 2015, pp. 35-45.
- 3 日本保育ソーシャルワーク学会編『保育ソーシャルワークの世界 - 理論と実践 -』晃洋書房, 2014.
- 4 岡村重夫『社会福祉原論』全国社会福祉協議会, 1983.
- 5 谷口泰史『エコロジカル・ソーシャルワークの理論と実践 - 子ども家庭福祉の臨床から -』ミネルヴァ書房, 2003.
- 6 土田美世子『保育ソーシャルワーク支援論』明石書房, 2012.